

南極通信



2017年1月11日
第 8 号
宮城教育大学附属中学校

編集担当：濱中

平成 29 年を迎え、いよいよ濱中先生が南極大陸に上陸しました。1 月 8 日に南極昭和基地からご挨拶をいただきました。観測隊長さんからのメッセージもどうぞ。

あけましておめでとうございます。

皆さん、お元気ですか？仙台は寒くなりましたか？
年末からのきらびやかなイルミネーションや、恒例の初売りでにぎわう街が懐かしく感じられます。

昨年末に念願の南極昭和基地に足を踏み入れました。大晦日に観測船『しらせ』にいったん戻り、それぞれの場所で活動している 58 次観測隊のメンバーや、海上自衛隊の乗組員の方たちと共に新しい年を迎えることができました。

南極にいと、今まで当たり前すぎて気づかなかった事を意識させられます。きれいな空気や水も、灯りや暖を取るための設備と資源も、先人の苦勞や工夫によって利用できていた事がよくわかります。また、人が安全に健康に、そして幸せに生きていくための力は、自ら努力して獲得していくものだと感じます。

2017 年は私にとって人生最大のチャレンジの年になりそうですが、皆さんにとっても、健康で、学びと喜びの多い素晴らしい 1 年になりますように、地球の南の果てからお祈りしています。



【写真 1】日の出？日の入り？…どちらとも言えません、白夜ですから。『しらせ』船上にて

しらせ神社に初詣

『しらせ』船内には富士山本宮浅間大社から分祀された『しらせ神社』があり、船の安全を祈願する神聖な場所となっています。新年を迎えたこの日『しらせ神社』は多くの初詣客でにぎわいました。



【写真 2】しらせ神社の神主さんと巫女さん(隊員が扮しています)



【写真 3】若人鳥もおせち料理を楽しみました



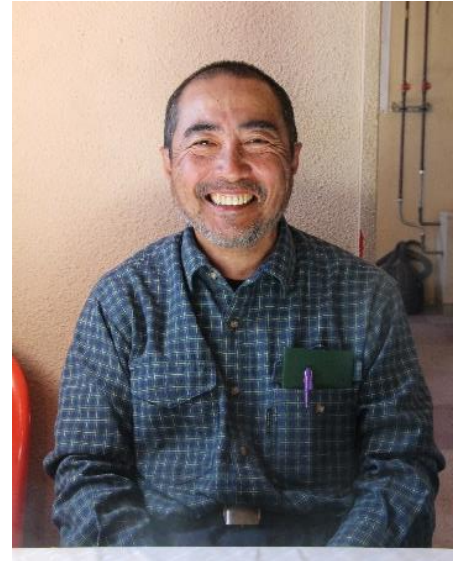
【写真 4】祝賀会では獅子舞も

新春インタビュー『YOUは何しに南極へ?』

隊長 本吉 洋一 さん(62) 千葉県出身

隊長の南極での仕事は、日本の家族の元へ、隊員全員無事に連れ帰る事。全員の仕事がしやすいようにする事。

これまでの仕事は地質の調査。どんな地質があるか、どんな岩石があるか、地層がどんな向きに伸びているかなどを地図上に記していく(地質図を作る)仕事。これまでに作った地質図は、南極大陸のルンドボークスヘッド、ルンドボークスコラーネ、ストランドニッパ、やまと山脈など主に未調査の露岩域。岩石を持ち帰ってサンプリングもする。岩石を0.03mmの薄さに削ってプレパラートを作り偏光顕微鏡で見ると、どのような鉱物があるか、また圧力や温度による変化や反応が見取れる。地質調査の現場で、あまたある石の中から、大陸の歴史についての情報をたくさん抱えている石を見つけるには、経験と丹念な作業が大切。「物言わぬ石にいかに多くを語らせるか」



野球少年だった中学生時代の自分には、現在のような姿は想像できなかった。高校生から山登りを始めたが、エベレストの山頂に石灰岩があると言った登山家の話をTVで見て、なぜこんな高い山に海の石があるのか?人類が知り得ていない事実がまだまだたくさんあるんじゃないか?という思いが南極への興味に繋がっていった。

大学で地質学を専攻し、当時はまだ国家公務員でなければ観測隊には行けなかったところを、博士課程を休学、そしてついには退学して行くことになった。初めて参加した23次隊では悪天候に見舞われ、思ったような観測ができず。その後、再び南極行きを願い出たものの状況は困難であった。当時を振り返ると、他のものを犠牲にしても南極観測だけは絶対成し遂げたい。という強い気持ちがあった。

南極は今回で9回目だが、一度行くと次の謎が出て来る。忘れ物を取りに行くような気持ちでまた行きたくなくなってしまうのが南極の魅力。

中学生の皆さんへのメッセージ。「何かに夢中になった事のある人間は、大人になっても仕事を一生懸命やれる人になる。好きなもの、没頭できるものを半端でなくとことんやってみて欲しい。学問をするため、先に進むためにはどこかで努力しなければならず、やりたい事のために我慢が必要な時もある。たとえ今すぐ実現できなくても、心のどこかで燃えているエネルギーの灯りを大切にしていればよい。」

隊員から絶大な信頼を寄せられている本吉隊長。穏やかな物腰の中に情熱を秘めていて、地球の成り立ちを物語る南極の魅力をたくさん教えていただきました。



【写真】隊長に案内していただき、昭和基地周辺をお散歩。

現在、濱中先生は、観測隊の日常の様々な業務に関わるとともに、地質調査隊に同行し南極大陸の岩石、鉱物採集等を行っています。また、2月に行う「南極授業」の準備を進めています。